H26. 12. 27

ひょうご

Dr.和の町医者日記

「生と死」シリーズ②

ありがとう、黒田裕子さん

去る9月24日、看護師の黒田裕子さんが旅立たれました。12月21日には神戸で「偲(しの)ぶ会」が催され、全国から多くの人が集まりました。たくさんのメディアで大きく報道されたので、彼女のエピソードをよくご存じの方も多いでしょう。私は黒田さんと10年前に知り合い、主に日本ホスピス在宅ケア研究会の仕事を一緒にやってきました。というよりも、黒田さんから命じられるままに動いてきました。現在の生と死に関するさまざまな活動は、黒田さんの影響を強く受けています。

20年前の阪神淡路大震災の時、黒田さんは宝塚市民病院の副総婦長でした。しかし、避難所支援のため外に飛び出したまま、病院には帰らず退職されたそうです。彼女は「看護のトップの候補者はいくらでもいる。でも、仮設住宅で困っている人を助けることが私にとって一番大切なこと」と言いました。神戸市の西神第7仮設住宅ができると、その一角にテントを張り、入居者が引きこもらないように見回りをしました。「孤独死を出したくない」という強い信念は、たくさんの被災者に勇気と希望を与えました。

その後も国内外で大きな災害がある度に、いち早く現地に入って支援活動をするなど、災害看護という領域の先駆者でもありました。彼女はNPO法人「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」の理事長として陣頭指揮を執りました。講演料の全てを活動資金にしてボランティアを貫きました。実は私自身も震災が人生の転機になったので、黒田さんと会えばいつも震災の話ばかりをしていました。

「人生旅の荷物は夢ひとつ」

そして平成23年3月11日にあの東北の震災が起きました。黒田さんは翌日には被災地に入られていました。その後、宮城県気仙沼市の面瀬仮設住宅での支援を今年まで続けられました。同年の大みそかに電話がありました。「長尾先生、明日来てちょうだい。みんな困ってんのよ」。

私は元旦の飛行機に飛び乗り、レンタカーで面瀬中学に到着すると、集会所ではボランティアの学生たちも一緒に寝泊まりしていて、深夜までみんなで日本の将来について語り合いました。

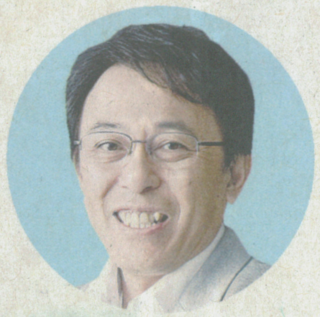
翌日、学生たちを風呂に連れて行こうとすると、黒田さんに怒られました。「ボランティアは風呂なんて入ったらあかんのよ！」。私は「正月なんやし、風呂ぐらいええやんか」と説得し、学生たちを久々の風呂に入れました。黒田さんも渋々ついてきてくれましたが、それくらい、ボランティアには厳しい指導をされていました。

一方、被災者には優しく笑顔を絶やしませんでした。被災された一般家庭にも同行しましたが、特に独居の高齢者は抱きしめて回っていました。1月3日には仮設住宅で講演をしました。拙書「平穏死・10の条件」は、こうした被災地のお正月から物語が始まります。

今年8月9日に、黒田さんと深夜まで飲んで話したのが最後でした。まさかその1カ月半後にこの世から旅立つなんて、思いもしなかった。そんな黒田さんの大好きな言葉は「人生旅の荷物は夢ひとつ」だったと後に知りました。今、この言葉を静かにかみしめています。「ありがとう、黒ちゃん」と。

今週、2冊の本が出ました。「その症状、もしかして薬のせい？」（セブン&アイ出版）と「家族よ、ボケと闘うな！」（ブックマン社）です。よろしければお正月に読んでください。印税はすべて福島県相馬市の震災孤児の教育基金に寄付しています。では、よい年をお迎えください。

NPO法人「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」 平成7年の阪神淡路大震災当日から神戸市長田区で高齢者や障害者の緊急避難所支援活動を開始。同年6月からは西神第7仮設住宅に拠点を置き、支援活動を24時間体制で続けた。現在も地域福祉のためのさまざまな活動を行っている。



長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。56歳。